



[男女共同参画社会の実現をめざす情報誌]

特集

男の本音 女の本音

OKAYAMA

2001.3

vol. 20

DUO

[デュオ]

シリーズ

さんかく社会のパイオニア Vol.2

かわりつつある学校

～男女共同参画への取り組み～

日本女性会議2000 津 レポート



岡山市

男の本音 特集 女の本音



A 女権拡張は 男性にとって不利

男女平等、男女共同参画というのは、理論的には正当で異議をはさむ余地は全くない。ただ、一昔前に比べれば、女性の地位は著しく向上しており、これ以上女権拡張を叫ぶ必要があるのかなと思う。「女性にとって住みやすい社会は、男性にとっても住みやすい。」というのは、女性側の一方的な言い分で、女性が一步権利を拡張すれば、その分男性は既得権を失う。会社で女性社員がしているお茶汲みや掃除を、これから男性も平等に当番制にしようと言われたらやっぱり嫌だし、家庭でも、仕事さえしていたら家事や育児はしなくてよいというのが今までの男性の既得権であったのに、女性も仕事をするからその分男性も家事育児をと言われるわけでもないで困る。

他の夫婦や他の家庭についてとやかく言う気はないが、自分の妻には、外で仕事をするより、家にいて精神的に余裕を持って、家事育児に専念してもらいたい。子どもの話をゆっくり聞いたり、

伝統的な年中行事を行ったり、季節の料理を作ったりして、家庭の中で文化を伝えていってほしい。男性の協力があれば妻が外で働いていてもそれが可能だという人もいるかもしれないが、企業は性別役割分担を前提に男性を雇用している。共稼ぎしながら潤いのある文化的な生活をしていけるほど社会は成熟していないし、その方向へも進んでいないと思う。

- 40代・男性・会社員 -



B 「嫁」という立場は 男女差別の象徴

日本の家の中での「嫁」という立場も、男女差別を象徴したものであると思う。別居している子ども夫婦が帰省した時、息子の妻は「嫁」という立場で忙しく立ち働き、一方、娘の夫である「婿」は接待される側になる。娘婿はあくまで客であり、ご馳走でもてなされ周りから気配りを受ける。一方の嫁は、そのために家の中を整え、ご馳走を作り気配りをするという役目を負う。子どもの配偶者であることに変わりはないはずなのに、女性は「嫁」という特別の立場に立たされてしまう。「嫁」というユニフォームを着せられると、たちまち本人の個性は覆い隠され、その家の中で家事労働を担っていくことが当然と見なされてくるような気がする。こういう立場に抵抗を感じながらも、女性の多くが家の中の全責任は自分にあるように思い込んでしまい、それができなければ、何かしら後ろめたさを感じてしまっていたりする。まず、その事を考え直してみる必要があると思う。家事は家族が協力しあい、できる事を分担しあって、それぞれ

21世紀がスタートし、男女共同参画社会の実現が重要な課題としてクローズアップされています。

建前で、「男女が性別にとらわれることなく、個性や能力を発揮できるよう、互いに人権を尊重しましょう。」という理念を述べるのは簡単です。でも、家庭、学校、職場、地域社会のそれぞれの場で実態がなかなか前進しないのは、ひょっとしたら、男女それぞれの本音の部分が建前とは大きく違っているせいかもしれません。

今回は、もう一度原点に戻って、反論は百も承知の上で、それぞれの本音を包み隠さず聞かせてもらいました。

建前ではなく、本音を率直に出し合うところから、互いの接点を見つけたり、問題点を改めて考え直したりできればと思います。

読者の皆さんも、ぜひご意見をお寄せ下さい。

が自分の事として受け入れていかなければいけない。そうすれば、女性の家事労働に対する意識も変わってくるし、「嫁」という立場に対してもそのあり方が変わってくるのではないだろうか。

- 40代・女性・主婦 -

C 次世代に伝えたい 夫婦のあり方

私たちが共働きだった時も、妻が専業主婦になってからも、私たち夫婦の関係は常に対等である。勿論、妻が専業主婦になってからは、家事や育児に関わる時間は妻の方がはるかに多くなった。しかし、だからといって、家事や育児が妻一人の仕事だと考えたことはない。たとえ、時間や量が妻に及ばなくとも、私には、家庭の中に夫としての役割と父としての役割があると自覚している。その役割は、どんなに仕

事が多忙であろうと、決して放棄してはならないと思っている。私は、娘に、家事や育児は女だけがするものだと思ってほしくない。社会では男女平等は当然のこととして認識されるようになったが（残念ながら実態はまだ不十分であるが）、家庭でも男女は対等な立場にあって、男も家事や育児に参加するのが当たり前だという感覚を身につけてほしいと願っている。

私は、子育てをする中で、「女らしく」とか「女だから」というような言い方は意識して避けてきた。子どもの玩具なども「男の子の遊び」「女の子の遊び」という区別をつけることなく、子どもの「個性」を大切に考えて選んだ。家事の手伝いも「女の子だから」という理由でさせたことはない。男であっても女であっても「家族だから」みんなで助け合うことが当然だと思っている。そして、何よりも、家事や育児に参加する私の姿を見せる事で、家庭の中においても男女が対等な関係であることを自然に認識させたい。それは、子どもたちの将来の幸せにもつながり、ひいては、社会に向ける意識にも広がっていくと思っている。

- 40代・男性・教員 -

D 今の夫婦のあり方が 老後を決める

夫は家事も育児もほとんど手伝ってくれた事がない。家事も育児も女の仕事だと決め付けている。しかもその労働に対する評価は低く、何か問題が起きると、ほとんど妻の力不足ということになる。子育てで大変だった時、泣き続ける子どもの声より、傍で見ていても何も手伝おうとしない夫の態度の方がよほど辛かった。夫はいつも、専業主婦の私や子どもたちに対して、「食べさせてやっている」と思っている。（実際そう言われた事もある。）私自身も働いて収入を得たいと願っても、私が外に出ると家事や育児が疎かになるという理由で、働くことも認めてはくれない。夫の

態度や言葉に決して納得しているわけではないが、抵抗してもけんかになるだけで（実際、過去に何度か試みた）、夫に私の気持ちを理解してはもらえない。子どもが自立したら、もう夫の世話をしようとは思わない。老後を夫と送ることは考えていない。私の心も子どもたちの心も、ある面で既に夫から離れてしまっているが、夫はそんな私たちの気持ちに気付くことさえない。「食べさせてやっている」と思っている夫が、私たちにしても「食べさせてくれるだけ」の存在になってしまったのは、夫にとって、かわいそうな気さえする。仕事を理由に家事も育児もほとんど手伝わぬ男性が、その仕事を卒業した時、家庭の中に自分の居場所が見つかるだろうか。妻から申し出る熟年離婚が増加している現状を見ても、私と同じ思いを抱いている女性が決して少なくないと感じている。

- 40代・女性・主婦 -



E 私たちも感じている 男女差別

小学校では女の先生が多かったが、中学校では男の先生の方が多い。教頭先生や校長先生となると、ほとんどが男の先生だ。PTA会長も男の人しか知らない。どうしてなのだろう。私たち生徒は男子も女子も同じくらいいるのに、どうして、こんな片寄りができてしまうのだろうか。

授業では、家庭科も技術も男女一緒に学んでいる。父や母が中学生の頃と比べると、男女の差別は少なくなったのだろうが、そんな中で、名簿の順番がいつも男子が先で女子が後という





のはおかしいと思う。式で並ぶのも名前を呼ばれるのも検診を受けるのも、いつも男子が先。無意識のうちに、男子優先が身に付いてしまいそうだ。男子の方でも、こういうのは嫌だと言っている人もいる。

先生も、男女は平等だと私たちに教えられる一方で、「男らしく堂々と」とか「女子は料理が上手なはずだ」などと、男とはこういうものだ、女はこうあるべきだという言い方をされることがある。私の友人は男子以上に堂々としているし、料理が得意な男子もいれば、苦手な女子もいる。これは男と女の違いでなく、個人の違いだと思う。

また、友達と家庭の話をする、女の子は「お父さんが嫌」という人が結構いる。その理由は、「自分勝手すぎる」とか、「他の家族が忙しく家事をしている、自分は命令するだけで何もせず、テレビを見たりごろごろしているから」という人が多い。しかも「女だから」という理由で、兄や弟が遊んでいても、自分にだけ家事の手伝いがまわってくるという人もいる。こういう人は、親との会話もしたくなくなるようだ。男女の不平等は、親子の関係にも影響していると思う。

- 10代・女子・中学生 -

F 総合職として 採用されたが・・・

就職活動の時、男女差別を実感した。「女子不可」と明言しているところはさすがになかったが、男子優先という雰囲気があった。就職情報の資料や企業からの会社案内も男子に圧倒的に多かった。男子から情報をもったり直接企業に問い合わせたりして、頑張った。

私は総合職として採用された。昇給・昇進の面で全く男女差別は無く、能力は正当に評価され、気持ちよく仕事をしている。しかし連日の残業である。多くの父親が家事・子育てに参画できないのも当然だと思う。私も子育てとの両立は無理だと思っている。今は子どもがいないので、夫とふたりで、家事は時間のある方、気のついた方がするというように協力しあっている。仕事と家事は両立させることができる。しかし育児が加わると疑問である。

職場には有能な女性がおられるが、独身か、既婚でも子どもいない人である。家庭を持ち子どもを育ててなお有能な人材として働き続けることは無理との証しのように私には見える。最近、2年先輩の女性が妊娠と同時に退職された。子育てとの両立は無理と判断されたという。理解ある伴侶に恵まれ、よい保育所があっても、子育てと仕事との両立は現状では困難だ。

- 20代・女性・会社員 -



G 仕事も家事も育児も 全力でやってきた私

私は仕事と家庭を両立させる人生を選択した。夫は賛成ではなかったが、何とか折り合いをつけてやってきた。仕事にも育児にも夫は協力的ではなかった。残業と休日出勤ですっかり疲労している夫に何も言えなかった。働かせて貰っているという負い目さえあった。自分が夫以上に疲れていたのに。家事には手抜きができるが、子育てには手抜きはできない。仕事も、そう思って頑張った。職場でも家庭でも地域でも誰からも非難されなくなかった。「だから女は・・・」とか「母親が働いているから・・・」などと言われなくなかった。特に子どもの小さいころは大変だった。夫に訴えても結局は「辞めたらいい」という結論になり、姑までが「息子の収入でやっていくのが妻の務め」と口をはさんだ。実家の母が時には泊り込んで応援してくれた。また職場の先輩は事あるごとに「どこの子もそうよ。うちもそうだった・・・」と笑顔で受け止め、よきお手本を示してくれた。もうすぐ彼女のようにになれる。そう思って自分を励ました。夫を当てにせず、「早く！早く！」と子どもを一方向的にせきたて、孤軍奮闘し、疲労困憊こんぱいだったあの歳月を乗り越えたら、働くことに迷わなくなった。

- 40代・女性・教員 -

H 経営者がみる 男性と女性

経営者が社員を評価する時、基本的には性別ではなくどれだけ自社に貢献しているかが重要になっていることは言うまでもない。しかし社への貢献度で見た場合、やはり男性の方が女性より勝っているという事実は否定できない。例えば、急な残業を頼んでも男性は無理をしてもやってくれるが、女性は「家庭があるとか、前もって言ってくれないとできないとか」言ってなかなかしてくれない。また、転勤を命じるにしても男性のほうが動かしやすい。仕事上のコミュニケーションをとる場合でも、男性になら「よくやった」と握手したり肩をたたいたりして喜びを分かち合ったりできるのに、同じことを女性にすると、「セクハラだ、何か下心がある」と疑われるのではないかと余計な心配をしてしまう。また、女性の採用に当たっても、男性以上の配慮と経費が経営者側に必要になってくる。労働時間の規制や出産のための休暇や生理休暇、更衣室や厚生施設などであるが、その代償がどの程度、会社に還ってくるかということを見ると、積極的な女性の採用はためらうものがあるというのが本音であろう。かといって女性に向いていると思われる仕事もたくさんある。企業の顔となる受付や電話交換、お茶くみや、顧客の心をつかむ営業などである。女性のもつ優しさや清潔感、「職場の花」的な雰囲気はやはり男性にはないものであり、女性の生かせる部所へは女性を採用していきたい。ただ女性の側にも仕事に対する認識の甘いところがあり、権利ばかりを主張し、仕事を結婚までの腰掛けに考えていたり、少し注意をするとすねて仕事をしなくなったりする女性もいる。経営者としてはそういう社員に給料は払いたくない。すべての女性がそうであるというわけではないが、仕事の能力そのものには性差はないと考えても、スムーズに能

率よく仕事を進めるためのさまざまな要件を考えると、経営者にとっては男性と女性をまったく同じ条件で同じ職種に採用するより、それぞれの適性に合わせた採用をしたいというのが本音である。企業は奉仕の精神はあっても、甘えは許されない、それは利潤を追求し従業員の生活を守る大きな責任を負うからである。

- 50代・男性・中小企業経営者 -



I 女性差別ではなく 「区別」だ

男と女が全く同じだという考えはまちがっている。男らしさ、女らしさという持って生まれたものがあり、それによって外で仕事をするのは男であり、家事は本来女の仕事になっている。過去の日本はどの家庭もそうっており、それで日本は発展してきた。最近になって女性が外に働きに出、自分の権利を主張するものだから、少子化という現象がおこっている。男と女を分けて考えることは「差別」ではなく「区別」だ。女性だって都合の悪いときには女であることを理由に力仕事を男に押しついたり、PTA 会長のような責任あるポジションから逃げている。女性が男性と同じ権利を主張するなら、男性と同等の責任をとれ！と言いたい。

- 40代・男性・会社員 -



J 夫婦別姓を望む私

ひとりっ子どうしの結婚だったことから、私の親が家の名前を継ぐものがいなくなるとずいぶん悲しかった。夫となる人は自分の姓を変えようなどとはみじんも考えず、私もつらい思いをした。

また職場でも新しい姓にかわったことで、外部の人にはいちいち説明しないといけなし、通帳や保険など、変更の手続きがわずらわしかった。また「結婚したんか？」と好奇の目でみられることもあり嫌だった。離婚して旧姓にもどった同僚のことを陰で噂する人もいて、かくしているわけではないが、男性だったら姓も変わらず嫌な思いをすることもないのでと思う。

- 40代・女性・会社員 -

K 育児休暇を取得後、 短縮勤務で職場復帰

女性が多い職場なので育児休暇は取りやすかった。しかし、育児休業中は、給料がゼロになり、経済力のない自分にひけめを感じ、それまでは夫に頼っていた家事も自分でするようになった。そして、職場復帰はしたが、残業が多く、保育園のお迎えの時間に間に合わないため短縮勤務を選ばざるをえなかった。

- 30代・女性・会社員 -



今回「ひとりひとりの本音を語り合うことで、何か解決の糸口をつかもう」という特集を企画しました。ぜひじっくり読んでいただき、それぞれの本音の背景にあるもの、その本音を言うまでの原因となっているものまでも考えていただけたらと思います。今回の本音に対する意見を集め、次号のDUOでは男女共同参画社会実現のために「私たちから取り組めることは何だろう」と探っていきたいと思っています。



ジェンダーをこえて各界で活躍している人を紹介するこのシリーズの2回めは、岡山電気軌道株式会社の浅田公恵（あさだきみえ）さんに登場していただきました。浅田さんは日本で第1号の女性の路面電車運転士として毎日岡山のまちを走っておられます。

「男女運転研修生募集」平成3年、子育ても一段落し、仕事を探していた浅田さんの目にとまったのは路面電車の運転士募集の新聞広告だった。「ほんとは事務系の仕事を探していたんですがどれも年齢制限でひっかかって・・・電車の運転士なんて男性の仕事と思っていたのに女性でもいいのかという軽い気持ちで受けました。」

「思ってもみなかった」という合格で日本初の女性運転士になった浅田さんだったがご家族、特に子どもたちの反応は賛否両論。「お母さんが、電車の女性運転士なんて恥ずかしい」という子どもの言葉に浅田さん自身迷いもあったようだ。「それが半年間の研修中だけでも200件の取材があり、テレビ・ラジオはもちろん子ども向けの教育誌から写真週刊誌にまで紹介されてしまったんです。学校にも近所にも知れ渡ってしまい、まわりが陰口しようにもできなくなったんですね。(笑)それに子どもの学校の先生も『浅田さんのお母さんはこういう仕事につかれていますので、みんなで応援してあげましょう』とクラスで言ってくださり、子どもも恥ずかしい思いをすることもありませんでした。」子どもが世間の目を気にして反対して



いたらとてもできなかったという浅田さん、バイオニアならではの悩みだろうか。

一方、全国に先駆けて女性運転士を採用したいきさつについて、当時の営業所長、現在営業部長の磯野さんにお聞きすると「当時運転士はもちろん男性ばかりだったので、女性を入れて雰囲気を変えたいと思って提案しました。会社内部では、運転士とはいえ故障のときは重い部品を持ち上げるなど力仕事も多く、とても女性には無理だと反対もありましたが、何とか決まりました。ところが、いざ採用してみると女性がひとり入ったことで雰囲気はがらりと変わりました。男ばかりでどうしてもルーズになりがちだった中に自然と規律ができ、男女が同じように仕事をしていくことで職場が明るくいいきとしたものになることに正直驚きました。」とのこと。

さて、では実際運転士としてのスタートをきってから

はどうだったのか。「運転士の国家試験には故障の時のために重い座席を持ち上げて中の連結器を点検するという実技試験があるので、そのために毎日社で練習しました。もちろん運転中にも重い部品を持ち上げることも何度かありますが、乗務員は私ひとりですし、やるっきゃないとがんばってやっています。おかげで力がつきましたよ。」と語る。また「道を走っている時に線路に車が止まっていて、よけてくださいと注意をしても、こちらが女性だとわかると無視され悔しい思いをしたこともあります。乗ってこられたお客さんから『女性なのに・・・だいたいどうぶ?』と言われたときにはかえって闘志がわきましたね。」とたのもしい一言。プラス思考で前向きに進んでいる浅田さんの姿勢に、女性には無理だと決めつけていた周囲の考えも変わっていった。「最初のころは第1号ということで、私が失敗したら会社はもう女性を採用しなくなるんじゃないかとプレッシャーがありました。続けていくうちにこの仕事は全く男女の関係がないと思うようになりました。それで肩の力がぬけて今はとてもいい状態で仕事をしています。」子どもたちの家事の協力も大きな力になっているそうだ。

現在会社では30人の運転士のうち女性が4人。全国的にも女性の運転士は増えているとか。「この仕事に男女の向き不向きは全くありません。お客さんに喜ばれ、役に立ってるんだという喜びの大きい、やりがいのある仕事です。」来年には新しくバリアフリーの低床車両が導入されるそうで「また研修です!」とさらなるチャレンジが続く。バイオニアとしての役目を十分果たし、なお前進を続ける浅田さん。気負いのないさわやかな笑顔が印象的だった。



「女性なのに・・・だいたいどうぶ?」の言葉にかえって闘志がわきました」



かわりつつある学校

男女共同参画への取り組み

21世紀の社会を生きる子どもたちのまわりでは、今男女共同参画はどんなふうに進んでいるのでしょうか。今回は岡山市内の学校現場での男女共同参画への取り組みを紹介します。

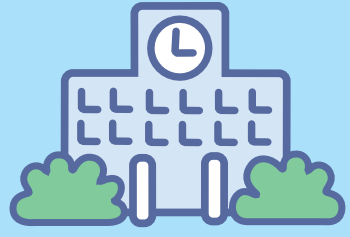
学校でも一昔前ではあたりまえと思っていたことが、徐々にかわってきています。子どもたちの純粋な心がまっすぐに男女共同参画社会へと向かうことができるよう、私たち大人もがんばりたいですね。

change 男女混合名簿

従来は、男子が先、女子が後という名簿がふつうでした。しかし知らず知らずのうちに何でも男性が先という観念を植え付けてしまう可能性があることから、男女別ではなく、男女いっしょに五十音順に並べた「男女混合名簿」が増えています。最初はとまどうこともあるようですが、使っているうちに「男女をわけることがかえって不自然に思うようになった」という意見も出ています。



体操服も男女同じ



change 持ち物の色分け

道具箱、裁縫箱、習字道具セットなど、女の子は赤やピンク、男の子は黒やブルーなどと固定的な概念で決められていました。最近はみんな同じ色にしたり、たくさんの種類の中から選ぶことができるようになってきました。また体操服も女子のブルマはなくなり、男女同じものになってきています。



制服のない学校もあります。ここは教室と廊下の壁がないオープンスペースの小学校

change 男女共修

技術・家庭科の授業は、小学校はもちろん中学、高校でも今は男女いっしょに行われています。固定的な性別役割分担意識にとらわれず、将来男女ともに家庭生活でも社会生活でも責任をもって生きることができるための学習がすすめられています。



男女いっしょに調理実習、この中学校では技術・家庭科の先生も男性（白衣が先生）



料金受取人払

岡山中央局
承認

7071

差出有効期間
平成13年3月
15日から
平成13年12月
31日まで

7 0 0 - 8 7 9 0

定形郵便物

岡山市大供一丁目1番1号
岡山市男女共同参画課 行



アンケートにご協力ください

(をつけてください)

性別	女性	男性			
年齢	10代 60代	20代 70代	30代 80代以上	40代	50代
デュオを見たのは	初めて 3回目以上	2回目			
入手先	市役所・支所 その他 ()	公民館	図書館	ふれあいセンター	

日本女性会議に参加して



「そや! 女も男もおんなじ人間やんか - 男女共同参画社会の実現のため - 」をテーマに平成12年11月10日・11日、三重県津市で「日本女性会議 2000 津」が開かれました。

男女共同参画社会の実現をめざして、毎年全国から多くの参加者が集まるこの会議は今回が17回め。男女共同参画に関するイベントとしては国内最大で、平成9年には岡山市でも開催されました。

今回、市からの派遣研修として一般公募で7人の方が女性会議に参加されました。その中のおひとり川上紀代子(かわかみきよこ)さんにその様子をおききました。

他県で開催される日本女性会議に初めて参加しました。1997年にその会議が岡山で開かれた時、それが何たるものかもよく知らず、ただ基調講演者の名に惹かれて聴きに行きましたが、ボランティアの方たちの生き活きとした姿に刺激を受け、会議の意味も知ることができました。

今回の応募は、また新たな刺激との出会いと、まだ行ったことのない津市に魅かれたからです。津駅に着いて、ピストン輸送で運行されているバスで運ばれた会場の県総合文化センターの立派さにまず驚き、オレ

ンジのスカーフを巻いた実行委員、スタッフの方たちの中に男性が少なからず見受けられたのも印象的でした。

基調講演では男女共同参画社会基本法が制定されてからの国内外の動きや、21世紀の新しい社会作りに向けて基本法がもたらす役割と展望を語った東京都立大学助教授の江原由美子さんの、『企業中心の考え方が最大のポイント、それが変わらない限り新しい展望はないだろう』という言に大いに共感しました。「有期雇用の増加、アウトソーシング(外注化)、人件費の圧縮等、人権の保障の対極にある部分での合理化が進んでいる」という中で男女共同参画社会を実現していく困難さを感じましたが、その実現に向けて職場は男女を問わず育児休暇を取りやすい環境作りに取り組むべきだと強く思いました。まだまだ女性が働き続けるための環境整備は十分とはいえず、基本法の基本理念を実効性のあるものにしていくにはどうしたら良いのか、課題を頂いたような気がしました。

分科会は「平和と共存」に参加しました。ベアテ・シロタ・ゴードンさんが日本国憲法起草にまつわるエピソードや、その憲法に寄せる熱い思いを語り、憲法を考える良い機会も得ました。私は男女共同参画に関する市民意識・実態調査の市民グループに関わっているので、この分科会に参加したことや、「全体会」のトーク“21世紀へのメッセージ”で「男女共同参画を考える若者の会」のメンバーが三重県が条例を策定するに当たり、独自の条例案を作り提言した経緯を聴けたことは刺激になりました。



前列左から2人めが川上さん

DUO vol.20 読者アンケート

A 特集「男の本音・女の本音」についての共感・批判など感想をお寄せください。

B 今回の「デュオ」で面白かった記事・役に立った記事

C 今後取り上げてほしいテーマ、その他ご意見などお待ちしています。

差し支えなければご記入ください

おなまえ

ご住所 〒

DUO vol.20 編集後記



事務局 Y

今回の特集「男の本音・女の本音」では、あえてまとめをせず、読んでいただいた方からの意見を集めて、そこから見えてくるものを次号のDUOで取り上げようという新しい試みをしています。みなさんからのご意見が次号のDUOをつくります。多くのかたのご意見をお待ちしています。左のハガキでもFAX(225-5408)でもEメール(danjo@city.okayama.okayama.jp)でもけっこうです。ぜひよろしくお願ひします。